



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.210
2021.3.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第38回 ● 宝ヶ峯に至る途：椎塚から獺澤へ

松本彦七郎の1919(大正8)年5月「陸前国宝ヶ峯遺蹟の分層的小発掘成績」(『人類学雑誌』第34巻第5号)は、冒頭で「宝ヶ峯(故坪井博士命名)石器時代遺蹟」(ゴチック体は引用者、以下同様)と宝ヶ峯遺蹟の由来に触れ、続けて「嘗つては故坪井博士又最近迄大野氏等の累次報告したものあり。」と関係する研究者も紹介し、同年3月に宝ヶ峯遺蹟の分層的小発掘に至る次第と成績が記される(流石に里浜貝塚報告の頃には「宝ヶ峯」は宝ヶ峯と修正済みとなり、併せて連載第36回の「峰」誤記も訂正し「宝ヶ峯下層期(式)」と正す)。宝ヶ峯遺蹟は東北地方における加曾利B式期研究史上極めて重要な標識遺蹟となることから、松本彦七郎以前に「コロボックル考古学」の対象としてどのような位置を占めていたか、特に学史的にも坪井正五郎の活躍から客死後の鳥居龍蔵へと人類学教室の主導者が交替した重要な時期と重なり、改めて加曾利B式研究として松本彦七郎の出現に果たした「コロボックル考古学」の意義を導出する。

ここで1895(明治28)年1月時点における坪井正五郎(教授:32歳)の人類学教室陣容を年長から順に紹介するならば、大野雲外(画工:35歳→明治35年:助手)、若林勝邦(助手:33歳→明治38年:逝去)、八木英三郎(標本取扱:26歳→明治35年:台湾総督府学務課へ転出)、鳥居龍蔵(標本整理係:22歳→明治29年:助手→明治39年:講師)という新進気鋭の構成である(寺田和夫(1975)『日本の人類学』)。就中坪井正五郎の「模様」形態学を継承するも年代細別を標榜し、離籍後の発掘で学史的な層位区分を獲得する八木英三郎、及び画工として大量の土器展開図を描き、後年の助手時代に「模様」形態学をアイヌ派に置き換え、「人種紋様」概念としての「土器紋様」論を唱道する大野雲外に登場願う(大倉潤(1996)「文様認識史への試論」『土曜考古』

第20号とは学問の背景と評価が大分異なる)。

先ず、明治26年に加曾利B式の標識遺蹟である椎塚貝塚を発掘・報告した八木英三郎は1896(明治29)年12月にも再び同貝塚を訪れる。そこで新たに貝層中から発見・採集した資料を1898(明治31)年12月の『東京人類学会雑誌』第13巻143号に第43図と共に「共同備忘録(第5回)(68)亀ヶ岡模様の土器を椎塚より発見す。」と報告する。この短報は山内清男が『茨城県史研究』第4号で第43図(ホ)の加曾利B2式土器等を削除し晩期土器のみで編集し解説したことで著名であるが、当時の八木英三郎の真意は「是等の品は皆一箇所に集合して他物を混ぜず」と層位について評価した上で、「亀ヶ岡式の品が関東より出しは今回を以て嚆矢と為すべし。」との関東(加曾利B式)と東北(「亀ヶ岡式」)の相互関係を知る新たな研究課題を展開するもので、その背景には両者の関係を「地方の差、部落の別有り、又年代の前後に因るとするも多少其間の連絡を知るべき品を見出さざるの理なし」と論議する人類学教室における「コロボックル考古学」の自由闊達な雰囲気がある。



▲第43図：八木英三郎による椎塚貝塚その後の出土土器

尚、この短報は備忘録にのみ留まることなく、やがて触れるが如く宝ヶ峯遺蹟出土の加曾利B式期と「亀ヶ岡式」の関係如何へと進展する学史的課題連鎖の発火点となり、この展開を経て松本彦七郎の「分層的小発掘」に至る学史的追究は加曾利B式期研究の醍醐味でもある。

さて、短報翌年の夏、八木英三郎は大学の命により「東北地方に於ける人類学的旅行」を行い(『東京人類学会雑誌』第15巻163号)、特に岩手県の鳥羽源蔵からは獺澤貝塚の重要性(後に「陸前国気仙郡小友村発見の遺物に就て」『東京人類学会雑誌』第15巻168号にて大洞A式中心、大洞C2式壺も紹介)を教示され、現地調査に至り大洞C2式中心前後資料の挿図を示しつつ、薄い貝層と厚い土層の両者から出土する「遺物は上下共敢て異なる点を見ず」との層位的な成果を得るが、調査の制約も悔みつつ「将来調査の価値あるものは実に小友村の獺澤なる可し」と結ぶ。

八木英三郎の「コロボックル考古学」は年代細別を身上とし、椎塚貝塚と阿玉台貝塚の調査報告以来各地の知見も踏まえ、「日本石器時代の土器に大略二様の別有り、一は精巧緻密にして形状模様共に美術品中に加へて不可なきが如きもの、他は疎大蕪雑にして実用の外他に価値の見る可き点なきもの之なり、(中略)関東より以北に至ては等しく認めらるる現象なり」と「精粗二種の品」にも着目し、「全体の上より謂はば東北の石器時代遺物は概して関東より意匠の進歩し居ること明かなり、此意匠の進歩なるものは(中略)今日の状態に在ては年代説に従う方適当ならん」と考察する。他方で門前貝塚の「大木8b式」鉢を「陸平式」と見做し、移動背景を「気象」変動に求める等、関東と東北の相互関係は年代別と地方別が暗中模索のまま宝ヶ峯遺蹟へと至る。

※巻頭連載は隔月です。次回は大村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 宝ヶ峯に至る途：椎塚から獺澤へ(第38回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第31回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第203回) 山元瞭平 …3
■考古学者の書棚 『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書』 藤森英二 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第31回) ————— 間壁 忠彦・間壁 葎子

6. 吉備真備の祖母骨蔵器(和銅元年・罔勝・罔依母夫人の墓誌銘を刻む)・「それでは何だ?はまだまだあった」(8)

前回、吉備真備の祖母で「母夫人」と骨蔵器に刻まれた女性には、吉備中の国で6世紀後半から7世紀にかけて、鉄器生産に加え、製鉄も行いその技術を高め、勢力を蓄えた「やた」氏族出身かと、物語のような推測をした。これには一応の理由はある。それは、一つには真備祖母骨蔵器出土地点の位置である。またこれと共に、『備中国風土記逸文』に今も真備町に残る「二万」という地名の逸話で、天智天皇が皇太子の時、朝鮮半島での争いのため、この地で軍を徴収、2万の兵が集まったので、「二万の里」と名付けたとの逸話である。

岡山県周辺の方は周知のことだが、『記紀』の中の古代吉備国では、地域の表現に「上道・下道」が使われて、豪族名にも使用されている。5世紀代に、わが国の前方後円墳で、第4の規模を持つともいわれ、大王墓にも擬せられるような造山古墳やそれに続く作山古墳などを築いた中心は、高梁川の広い下流でその東岸域である。『記紀』の中ではこの頃の重大事件として、河内・大和の大王勢力を揺るがす、吉備の反乱も語られているが、その際には、吉備の上道と下道両地域それぞれの豪族の、異なった反乱としてえがかれている。

下道氏の反乱といえ、造・作山古墳の築かれた地域がまず思い浮かぶ。しかもこの地には、6世紀以降にも、なお全長100mからの前方後円墳が築かれ、内部には巨大な横穴石室を持つ、こうもり塚をはじめ、多くの古墳が築かれている。

奈良時代となっても、下道氏を名乗る一族の骨蔵器なら、高梁川東岸域にある、こうした注目される古墳群周辺で発見されても不思議は無い、とも思われる。

しかし前回以来繰り返して言うように、出土地は高梁川の西。現在も地名に「箭田」を残した地があり、そこにも、こうもり塚と同様、大和の石舞台にも匹敵するような、巨大横穴石室墳が築かれていた。周知のことながら、この頃の古墳には、世代を超えて血縁の人々が埋葬されている。真備祖母の骨蔵器は和銅元(708)年、まだこうした古墳の埋葬者は、人々の記憶にあるだろう。骨蔵器の出土地点は、この古墳より、なお西ではあるが5~6kmに過ぎない地点での出土。

骨蔵器よりは半世紀ばかり後、天平宝字7(763)年銘だが、この箭田大塚と骨蔵器のほぼ中ほどで発見されていたのが、先項で述べた富比賣の墓地買地券。その文面には「備中国下道郡八田郷…郷長矢田部益足」とあった。

真備祖母骨蔵器の出土地点はそのすぐ西方だが、当時はすでに小田郡のはず。ただ小田郡か下道郡かの区別がつきにくい地点ともいえる。当時の下道郡は高梁川沿いに北方には延びているが、西には郡が評で記された古い木簡にも「おだ」があるので、「富比賣墓地買地券」の出土地は、当時も明らかに下道郡であったが、母夫人の骨蔵器のほうは、埋納された時期には、どちらであったのか。骨蔵器の刻文には、後世の発見者が移動することを禁じているが、このような埋葬地点にも理由がありそうだ。

箭田大塚も含め、三者互いの葬地地点は、それぞれ数キロ離れるが、高梁川へ西から流入する小田川の北岸沿い6kmばかりの間である。現在この三遺跡を歩いて回っても、位置さえ知っておれば数時間もかからない。下道朝臣二人の母の葬地でありながら、出土地の郡名は、当時は既に小田郡、しかし下道郡「やた」に密接する地だったのだ。

かつての吉備下道の中心地域で、高梁川下流の両岸地域に広がっていた、鉄器生産地や製鉄地域も、7世紀末には飛鳥地域出土木簡などから、すでに高梁川東岸地域は下道(評)でなく加夜(評)と呼ばれているが、そこは備中国府のある中心地域で、江戸時代にも矢(八)田部村の地名は残っていた。8世紀以降の備中国で郡別では、巨大古墳や国分寺・尼寺跡の存在する高梁川東岸地域一帯は都宇・窪屋・加夜の各郡なのである。しかし西岸地域には、藤原宮木簡などに下道郡矢田里などがあり、そこに記された人名には矢田部を名乗る人物もいる。矢田の名は古くから引き継がれ重視されていたことが窺える。吉備国時代での吉備下道の意識が残る中で、下道氏として、しかも矢田氏とを結ぶ地という墓域を示していることこそ、母夫人の出自を「やた」氏と思う強い理由である。

いまひとつの備中国風土記逸文での二万の里は、今も真備町内に上二万・下二万として残る。先の小田川北岸の3葬地遺跡に対し、ここは小田川の南岸、小田川が高梁川への合流点から2km足らず西方で箭田に近く、かつては、小田川の遊水谷を思わす低地の広い谷が深く南に続く地である。その小田川に接するかなり低地点に、古くから二万大塚として知られた前方後円墳があり、横穴式石室墳であった。この低い谷間を南に通ると、かつては瀬戸内海に直結している。そこに阿知の地名が残ることも、渡来人の多かったことを示し、吉備の文化に影響を与えただろう。この一角の古墳群は、ここ数年来岡山大学よっての調査も進んでいるが、古くより吉備中枢部への入り口の一つであったのだ。

後の天智天皇が、この二万の地で、そこが栄えていたと見て兵士を徴集したのも、鉄器引いては武器生産も盛んであったことが、要素であろう。当時その中心勢力の実態は矢田部であった、母夫人を「やた」氏出身かとするいま一つの理由であった。

間壁忠彦 略歴

1932~2017年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年	同上館長
1968~1998年	広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年	(財)倉敷考古館学術顧問

間壁葎子 略歴

1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年	中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。

Uレエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 203

上大利小水城跡 ～福岡県大野城市

山元 瞭平

今回取り上げる上大利小水城跡は、私が調査に携わった遺跡の中でも特に思い入れがある。とは言うものの、恥ずかしながらその存在を知ったのは大野城市に就職してからだった。その後すぐに確認調査の担当となり、この遺跡と正面から向き合うことになった。特別史跡の調査ということもあり、日々悩みながら現場へ立っていたことを思い出す。昨年度には調査成果をまとめた報告書を刊行し、一区切りを迎えることができた。今回は、調査から見てきた古代人の巧みな土木技術についてご紹介したい。

さて、水城跡は、白村江の戦いに敗れた倭が、唐・新羅軍の侵攻に備えて築造した土木構造物である。日本書紀によれば天智三年(664年)の築造とされ、東西約1.2kmにわたって延びる土塁は、福岡平野が最も狭くなる部分を塞いでいる。この水城跡のミニチュア版ともいべき遺構が今回の主役、小水城跡である。先に述べた土塁よりも西側に広がる小谷に築かれており、上大利小水城跡のほか、春日市の大土居小水城跡・天神山小水城跡とともに、堅固な防衛ラインを形成している。これらの遺跡は特別史跡「水城跡」に指定されている。

上大利小水城跡は現状で長さ80m、最大幅15m、高さ3mを測り、東側に向かって先細りとなる。周囲は宅地化が進み、土塁は取り残された島のようなのだが、その東西には丘陵の高まりが残り、この場所が谷であったことを教えてくれる。

さて、私が携わったのは第3次調査である。整備に先駆けて実施したもので、土塁前面部(北側)の規模や構造を明らかにすることが目的であった。東側に設定した調査区を掘り下げていくと、南北に異なる堆積が見えた。北側に堆積したぶ厚い腐植土層をすべて取り除くと、南側に向かって立ち上がる土塁が姿を現した。現在の地表面から約2mも下に築造時の土塁裾が眠っていたのである。裾から土塁を見上げると、巨大な壁という表現がぴったりだった。土塁は二段構造で、土台となる傾斜の緩やかな土塁を築いた後、高さのある二段目を積み上げている。土塁築造に先立ち、谷部の堆積土をすべて除去し、基盤層となる岩盤を露出



▲調査時の上大利小水城跡(北西から)(山元編2020より引用)

させた後、砂質土と粘質土を細かい単位で積土していた。また、下層には敷粗雑工法を用いるなど、谷部の軟弱地盤を克服するための工夫が随所に見られた。土塁前面部に濠は確認できなかったものの、湿地状を呈しており、足止めの役割を果たした可能性も考えられた。

一方西側は、丘陵の裾部を土塁に取り込んでおり、積土の省力化を図っていた。丘陵を土塁状に成形した後、谷部に比べると厚みのある単位で積土しており、地形や地盤に応じて異なる工法を用いたようだ。また、西端部分は築造当時の状況を残していると判断できることから、土塁は西側の丘陵に取りつき、谷を遮断していた訳ではなく、人が往来できるような解放空間があったことも判明した。

こうした成果から、築造時の上大利小水城は長さ90m以上、最大幅23m、高さ5mに復元でき、築造時の姿がよりイメージできるようになった。その一方で、未解決の課題も多くある。谷をせき止めているため、当然排水を必要とするが、現状で木樋などの導水施設は見つかっていない。また、先述のように西側に空間があったのであれば、門や道路などの施設が想定されるが、考古学的証拠はない。しかし、調査終了後、新たな発見があった。小水城跡から北に700mの上大利老松神社に安置されていた石が、古代の門礎石(唐居敷)であることが判明したのだ。これは、水城跡の築造時期に近い年代が想定されるもので、水城跡西門か上大利小水城跡のいずれかに伴う可能性があり、先ほどの疑問に迫る重要な資料と言えそうだ。

調査が終わると同時に整備が始まり、土塁の北側部分は広場に姿を変えた。この広場は、市民によって「小水城ゆめあかり広場」と名付けられた。名前は、小水城の歴史を伝える地域の団体「小水城の会」が毎年開催している「小水城のあかり」という紙灯籠を灯すイベントに由来する。開発が迫るなか、こうして上大利小水城跡が現代まで残されてきたのも、地元の人々の手によって守り伝えられたからこそである。この広場が人々の憩いの場になるとともに、地域の歴史に興味を抱ききっかけとなるような場所になってもらいたいと願っている。

参考文献:

徳本洋一・舟山良一編 2016『上大利小水城跡』大野城市文化財調査報告書第147集 大野城市教育委員会

山元瞭平編 2020『上大利小水城跡2』大野城市文化財調査報告書第180集 大野城市教育委員会

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは片山弘喜さんです。



▲整備後の上大利小水城跡(筆者撮影)

考古学者の書棚

「栃原岩陰遺跡発掘調査報告書 第1次～第15次調査(1965～1978)」

藤森英二 編／北相木村教育委員会(2019)

藤森 英二

栃原岩陰遺跡の報告書

本書は、長野県北相木村に位置する国史跡栃原岩陰遺跡のうち、1965～1978年に「栃原岩陰遺跡発掘調査団」によって行われた発掘調査の報告書である。栃原岩陰遺跡は複数の岩陰からなるが、このうち面積約60㎡、深さ560cmに及び開口部である「栃原岩陰部」がこの時の主な調査区で、12体の人骨をはじめ、縄文早期を中心とした実に多様な遺物が出土している。本書では、この調査の経緯や過程を紹介し、膨大な遺物の中から2,100点を超える人工遺物(土器、石器、骨角器、貝製品等)の他、5体の埋葬例を含む人骨、多数の動植物遺存体の出土記録等を掲載している。

出会いと取り組み

1994年、学部3年の夏休み。2週間に及び長和町鷹山遺跡群の調査を終え、私は仲間と連れ立って、茅野駅からJR小海線に揺られ、佐久地域の考古資料巡りの旅をした。この途中で、栃原岩陰遺跡の遺物を展示した北相木村考古博物館を訪ねている。

その2年後、なんの因果か、私は同館に勤務することとなった。しかしその時点では、1978年までの調査成果は未報告の状態。「いずれは報告書を」という内外からの要望の中、就職したての私は右も左も分からないまま、一人遺物を広げ、過去の台帳と付き合わせながら整理作業を始めた。やがて、剥片石器や土器、さらには哺乳類骨の分類や計測、実測には、各地の学生、院生らが集まり力を貸してくれるようになった。

また当初は、発掘初期からこの遺跡に深く関わっていた方々に直接話を聞き、様々な援助を頂いていたが、「報告書を出す」という思いを抱いたまま、その後鬼籍に入られてしまう方が相次いだ。

それらも含め、様々な人の想いが詰まった遺跡である。私にも私なりの思い入れはあるものの、プレッシャーも大きい。そして「果たしていつ出せるのだろうか」という不安。やがて20年という時間の流れの後、文化庁の助言もあり、国庫補助金の交付が決定。向こう3年という期限が決まり、急ピッチの作業が始まった。

整理作業の中からの推察

さて、いざ刊行となると、これまで部分的に発表されてきた遺物や情報を、いかに網羅し、かつ統一的に記載出来るかが鍵となってきた。特にこの遺跡では、所謂層位的発掘やそれに即した遺物の取り上げが行われていない事について、これを否定的に評価する向きもあった。その点をどう理解していくべきかを強く意識した。

そして、調査の記録を見直す中で、遺物の出土レベル(地表面からの深さ)には特に注意し、これを基礎に据えることで、遺物自体やその組成の変遷を認識出来るようになるに至った。

また、調査時の平面図、セクション図は、場所が特定出来ないものも多く存在し、結果的に岩陰の全てを網羅するには至っていないが、各部で水平に近い堆積や破壊されていない炉が多数見られることが提示出来た。これは遺跡の形成や埋没過程を考える上で無視できない事実であろう。

自然遺物については、当然それぞれ専門の研究者に分類から記述までをお願いしたものが多く、これらも出土レベルにそっての変化が追え、人骨については、ある時期にのみ埋葬が見られることを再確認した。また、過去に行われた理科学的分析のうち、年代測定については遺跡理解の根幹に関わるものとして、計21点の測定結果を掲載したが、これも岩陰内の乱れの少ない堆積の傍証となった。

本来の土器研究

上記のそれぞれについては、全国遺跡総覧でも閲覧可能となる本書を参照して頂きたいが、縄文時代研究の基礎はやはり土器と言える。栃原岩陰遺跡の土器は、過去にも様々な場面で部分的に取り上げられているが、層位的な事例として捉えるべきか否かで、編年研究の上でも評価が割れて来た。

「栃原岩陰部」付近出土の土器は、現在およそ8,000点が確認されており、今回はこの中から約1,000点を掲載した。ただし、これは土器の主たる文様をもとに分類し、出土地点と共に記載したに過ぎない。一部、既存の型式を交えながら記述を加えてはいるが、私の力不足から、体系的な理解には及ばなかったのが事実である。また、例えば「無文土器」とした中には、整形痕から関東地方の撚糸文系土器の終末に位置付け可能な資料もあり、それがどの様な土器に伴うかは、広域編年を考える上で重要な問題となり得ただろうが、特に言及は出来ていない。これらは今後の課題とせざるを得なかった。

栃原岩陰遺跡の時期区分は可能か

しかし総合的には、大枠で捉え得る土器の分類に伴い、石器や骨角器、動物遺体の多寡、更にはその組成の変化が連動していると判断出来た。また年代測定の結果も含め、多くの資料が年代順に出土し、堆積に大きな乱れのない状態がうかがえた。すなわち、本書「第7章 総括」で記したように、縄文早期のうち、明確な岩陰の利用が認められる初頭から中葉について、大きくは4つの時期区分が可能と結論付けた。これは結果的に、調査当時の考察を含めてこれまでの見解を踏襲するものであったが、多数の遺物や遺構と共に、アップデートした形でこれを示せたことで、一つの役割を果たせたかと思っている。

無論、不備もあろうし、異なる解釈が見出されるかも知れない。そもそも報告書としては不必要な考察ではなかったか。それらも含め、栃原岩陰遺跡の基礎資料として、大いに活用して頂ければと願っている。

尚、遺物の実測等については、株式会社アルカの皆さんに大いに尽力して頂いた。同社顧問の宮崎朝雄氏にも、窮地を救ってもらっている。その他、本当に多くの方々にお世話になったが、名前を上げると切りがないので、以上の紹介に留めたい。

アルカ通信 No.210

発行日 2021年3月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp